

光明眞言功德繪詞

梅 津 次 郎

滋賀縣葛川村明王院に藏せられる光明眞言功德繪詞三卷は夙に知られる繪卷で、應永五年の奥書があり、粗々その製作年代を其處に定置すべき作品である。それは我が繪卷物の歴史がその輝きを失つて既に衰頹期に入つた頃の作品ではあるが、之は之として十分に藝術的乃至歴史的價値を擔ふものである。繪卷物史の完整を將來に希望する者にとつては、世に知られて既に久しいこの作品が殆ど全く未だ嘗て正式に報告されてゐないと云ふことは多少感慨を催すべき事實である。

光明眞言は大日如來の眞言にして、又一切佛菩薩の總呪とせられ、所説の經典としては「不空羅索神變眞言經二十八灌頂眞言成就品」^(註一)「不空羅索毗盧遮那佛大灌頂光眞言」^(註二)並びに「毗盧遮那佛說金剛頂光明眞言儀軌」^(註三)がある。而して光明眞言法は阿婆縛抄等によるに既に古く平安時代以來行はれてゐたことが知られる。しかしその深義に最も強く動かされた人は明恵上人である。上人は特に元曉の遊心安樂道の所説に據り此呪によつて加持せる土砂の機能を信ぜられたもので「光明眞言加持土沙義」「光明眞言土砂勸信記」「同別記」「光明眞言句義釋」等の述作があり、我邦光明眞言の信仰は此人に始まると云つても過言ではない。爾來その影響は廣く永く及び、こゝに述べんとする繪卷も亦その流れの中より生れ出

でたものと見られるのである。

即ちこの繪卷三卷の内容形式は加持土沙義乃至勸信記の所説を繪卷の體裁を假りて補足的數行的に記述せるものと考へることが出来る。詞書に云へる如く、上卷は光明眞言の功德による現世利益、中卷は四惡趣の苦果より救はれ淨土に生るゝの利益並びに加持土砂の功能、下卷は現證の勝利としての蘇生譚より成るものである。しかるにかゝる明確なる企劃にも拘らず現在の形式には多少の混亂が認められる。それ等の疑問を解く爲めにも、先づ内容を通覽することから始める。

上 卷

第一段「詞」全卷の總序で、光明眞言の由來並びに此呪の義理を畫圖に表はさんとせる所以を述べる。^(繪)二場面から成る。第一は釋尊普忍辱仙として巖穴中に修業、光明眞言を誦し頂より光明を放つて大千世界を照耀し正覺を成ぜる様を圖せるもので、光明中に六道を象徵する燃ゆる釜・馬・人間・天人・修羅・餓鬼が描かれる。之に續き一つの川を隔て彼岸としての佛土が描かれる。中尊は印相から見れば彌陀、五佛冠を頂くより見れば大日。恐らくはこれ詞中に光明眞言は大日彌陀兩軀の如來の肝心云々と記せるに關するものであらう。此二場面に於て此岸と彼岸の姿が總收され、この繪一段はまた全卷の總序である。

第二段〔詞〕愚癡を斷ち智慧を得、萬人の師範となる利益。〔繪〕傾く陋屋中一僧光明眞言破地獄曼荼羅の前に念誦する有様、轉じて僧の貴人の邸に於て仰敬供養を受ける有様を描く。之先の僧得益の狀を表はしたものであらう。

第三段〔詞〕貧は諸道の妨、此呪によつて大富貴を得る利益。〔繪〕厨房に鼠走り、兒の頭を搔く女親、荒廢せるその家の中に在つて立烏帽子の下司が例の曼荼羅に向つて數珠を爪繰つてゐる。轉じて既あり家豊かに酒盛する一家を描き、前者得益の狀をあらはす。

第四段〔詞〕貴人上下の

光明眞言功德繪詞奥書

滋賀 明王院藏

愛敬を得る利益。〔繪〕一

屋中に一男件の曼陀羅に對し、又他の室にて使者の齋らせる手紙を読む。

次いで召により騎馬にて馳せ參するところあり、終りに第宅の縁に於て件の男が響應されてゐるところが畫かれる。

第五段〔詞〕この呪を誦

持する法師の身を吹ける風は、之に當る一切衆生を成佛せしめる。〔繪〕丘上に一僧立ち、風は衣を靡かせてゐる。風下の人家や庭上から雲に乗つて人間・犬鶏が昇天する様。

第六段〔詞〕卒都婆を造り此呪に彌陀の梵字書添え父母の墓に安置すれば、其靈魂極樂淨土に生ると。〔繪〕二基の五輪塔婆の前に一僧あり、口より五色光出づ。件の塔婆より雲湧き男女それに乗つて昇天するところ。

第七段〔詞〕女身を厭ふ女人は此呪によつて男身を得、又女人は此呪によつて大梵天王に生る。〔繪〕一女人合掌し、その頭邊より雲出で梵天現するところ。他に合掌する女人、之に對し一男子あり、女人轉身を現すものか。

光明眞言功德繪詞

第八段〔詞〕天上に化生する利益。〔繪〕地上に一男合掌、一天人飛昇して雲間に見ゆる天界に向ふ。

第九段〔詞〕醜貌の女人も端正の容を得る利益。〔繪〕白髮の老女と若き女人共に數珠をもちて坐す。

中 卷

第一段〔詞〕地獄の苦を離れて淨土化生の利益。〔繪〕地獄の門内、劫火中に罪人苦患の様。獄卒罪人を鐵臼中に擣く所。又罪人を兩巖の間に壓碎く所あり。最後に合掌する一僧の手先より五色光出で鐵瓮中に煎らるゝ罪人の雲に乗つて昇天する様を描く。

第二段〔詞〕餓鬼道を離れ極樂界化生の利益。〔繪〕樹果を採らんとすれば劍と變じ、流れに水を飲まんとすれば火と化し、飯を食まんとすれば火と燃ゆる苦患の様や、自らの惱を碎いて食する餓鬼、自らの兒を食する餓鬼の諸相。最後に僧の手より出づる五色光に浴して一餓鬼の食を得、天人の姿とな

りて雲中昇天する様。

第三段〔詞〕畜生道を離れ安養刹土の樂を受ける利益。〔繪〕蛙、蚯蚓を喰ひ、蛇之を呑み、猪之を窺ひ、樹間の獵者之に弓を引き、惡鬼その背後に戈を擬して迫る畜生道の寓意畫。續いて野に遊ぶ馬牛、直垂の男の口より出づる五色光に觸れ昇天する様。

第四段〔詞〕修羅道を離れ極樂化生の利益。〔繪〕騎象の帝釋、日月を持する阿修羅並に眷屬等雲中に相闘ふ。椅子に坐する僧の口より出づる五色光に觸れ阿修羅昇天の様。

第五段〔詞〕加持土砂の諸々の機能が併せ述べられ、遊心安樂道中の釋文を

七

引いてその巨益の仰ぐべく信すべきことが述べられる。「繪」山間に馬を馳せて猪鹿を射る武士の殺生より、剽盜、殺人の惡業、邸内の飲酒逸樂の様、家人の悲嘆のうちに主人の火車來迎に接する様を次々に展開する。之は詞中にはなく、前段四惡趣に續いて人道の苦を描いた。轉じて山間の溪流に土砂を採り、庵室中に件の曼陀羅を懸け方壇上に土砂を加持する僧。更の一轉して人骨や五輪塔の散らばる墓場に一僧土砂を撒するところ、五色の雲立昇りその中に馬(畜)修羅、燃ゆる釜(地獄)が現はされてゐる。

第六段「詞」先世の業力により歩行中足萎ゆる者、魑魅魍魎に悩まざる、病者等の悉く癒やされる利益。「繪」足萎の男、僧の手より出づる五色光に觸れ歩行する様。病褥中の女人、僧に加持せられ鬼形退散する様。(此一段は一應先のるべきものとも考へられるであらう。之については後説)

下 卷

第一段「詞」現證の勝利として明惠上人の弟子定圓定龍の蘇生譚が語られる。即ち定圓なる僧明惠の許に參じ後世菩提のことを問ふ。上人は、弟子定龍の光眞言を誦持せる功によつて地獄より蘇生せる旨を述べ、之を誦持すべきを奨む。定圓よつて誦持退轉することなかつたが、或日病を得て頓死した。同行の僧等骸を野邊に送つたが禽鳥噉食等屍を噉ふことがなかつた。彼等不思議の思をなし日々訪れて様子を見たとき云ふ。「繪」屋中定龍例の曼陀羅に對する場、又定龍の死に一僧泣く場あり。轉じて墓場中に捨てられた定圓の骸をめぐつて烏犬共の嗷叫する狀、一僧これを顧みつゝ去るところ。

第二段「詞」定圓冥途中光眞言を誦し琰王より本土に歸るべきことを示さる。「繪」定圓の口中より五色光出で獄卒畏怖する様。又琰王廳の門前にて獄卒五色光に觸れ昇天する様。琰王の前にて五色光を出せる様。

第三段「詞」定圓隨喜の思に住し、程なく蘇生。「繪」墓場中に定圓蘇生し犬共驚ける様。

第四段「詞」定圓本坊に歸り、急ぎ明惠を訪ねて事の由を報告す。上人悲泣感歎し、石水院傍の清流中より土砂を採り、三時之を加持し衆生往生淨土の

誓願を立てられたと云ふ。「繪」庵室の明惠定圓に對す。側に流水あり。

第五段 其後定圓此眞言を誦持する事八年遂に欣求淨土の念願を遂げたと云ふ。「繪」定圓庵室中に端坐合掌、彌陀三尊來迎の圖。ありふれた場面であるがこゝで全卷の終局が完成されてゐる。

以上は三卷の結構である。此現狀を構成的に見る時は、上卷の序論より始めて以下中卷第四段迄は現當利益を順次列舉し來り、同第五段に於て加持土砂の機能を説き併せて上來の總收的結論を述べてゐるに拘らず、第六段に於て再び現世利益を説き此一段のみが先の序列から孤立してゐることは解し難いと云ふべきであらう。しかし今所據の經典に遡つて之を考へるに、上卷より中卷第四段迄は光明眞言儀軌の所説によつて敷衍せるものであり、中卷第五段及第六段は神變經所説に由來せるものなることが判る。この事實を直視する時、第六段の詞及繪は、我々は之を先の現世利益の箇條書中に整理してしまひたく、又しかすることにやつて我々は中卷の繪卷の構造にそのあるべき姿を見出し得ると思ふのであるが、しかも下述する如き此繪卷の示す明瞭なる構成的意圖にも拘らず、所詮は之を錯簡であると斷言し得ないであらう。

翻つて更に此繪卷全體の成立を考へるに、先づ人は中・下卷の卷頭に夫々「第一の卷には現世の得益をあらはしこの卷には四惡趣の苦果をすくふ事をあらはす」、「以前の一二の卷には儀軌本經の説相をひきて功能の甚深なることをあらはせり、今この卷は現證の勝利を記して」と云ふ構成的な意圖を詞中に迄表現した文字を稀らしと見るであらう。而してかゝる性質も亦此詞書成立の實際的基礎となつたものが明惠の加持土沙義乃至勸信記であつたことに關聯すると思はれる。先に中卷第五段及第

六段は神變經所説に由來すると述べたが、實は之等の段及下卷の内容は直接には此兩書に關係する。此兩書は知らるゝ如く前者は漢文、後者は和文、その間内容的には繁簡出入を存するが、根本的には主旨構造を等しくするもので、後者は前者の平易化された解説書とも見られるのである。而してこの加持土沙義は明恵自らその冒頭に語る如く、遊心安樂道の文を引いて祖師の祕訣を出し信解の證據となし、次ぎに上人自らの註文を加へて土沙の機能を顯はせるものである。之を本繪卷に對比すれば、中卷第五段の内容はその前半を基礎とし、下卷はその後半を基礎として成立せるものと推定し得るであらう。もとよりこの間に詞書作者の作意が見られることは云ふ迄もなく、殊に加持土沙義に於ては單に定龍のことが語られてゐるに過ぎないのに、繪卷に於ては明恵に定龍の話を聽いた定圓の蘇生譚として複雑化されてゐる。而して繪卷の詞は文章に於て又細部に於て勸信記に近い點もある。

即ち本繪卷はその成立の基礎を加持土沙義乃至勸信記に有ち、前半は光明眞言儀軌によつて之を補足し、中卷第六段は遊心安樂道の神變經所引中になき所からみると本經も亦遡つて參照されたことが判るのである。

繪に於ても亦詞書と同様前代の繪様に負ふところを指摘し得る。殊に中卷四惡趣乃至人道の描寫にそれを見ることは指摘する迄もないことも知れぬ。六道は平安時代以來屢々畫題となり、作品として多少のものも遺されてゐるが、暫く作品の時代的定立を離れて考察する時、中卷餓鬼道中樹果を採らんとする餓鬼、又同卷狩獵の場面等は禪林寺所藏十界

圖中に酷似する繪様があり、畜生道に於けるかの一連の構圖は所謂北野根本緣起、來迎寺十界圖等に之を見、修羅道の繪様の如きも亦根本緣起等より脱化せるやうな感がある。即ち之等各段の繪に於ては、素材を傳統的な圖様に負ふものであるから、此繪の作者自身の構想力乃至描寫力乃至時代性を觀る爲めには餘り適當ではなく。寧ろその爲めには我々はそれ等を暫く措き、他の畫面に就かねばならない。

箇々の事物が有機的聯關を保つ、或ひは保ちつゝ推移する古い繪卷の持つ美しい構圖は最早そこにはない。在るものは想像力の著しい衰頹(例へば上卷第八段昇天する天人)と卑近性への微し(例へば中卷第五段酒宴の場。之は場面が卑俗なのでなく描寫が卑近なのである)である。我々はかかる現象を繪卷物の歴史が示す吉野朝より室町時代への特質として理解する。少しく之を作品に即して述べるならば、應安から康暦に至る間に作られたとせられる東寺本弘法大師繪傳、應永廿一年書寫の清涼寺本融通念佛緣記繪卷等中に矢張り近似するものが見出される。尤も之等も亦夫々の先蹤を持つものとして、精細に比較論及せらるゝことが必要であるが、兎も角も、之等の比較によつて我々は此繪卷の製作年代を奥書に示される應永五年に定置することに殆ど何等の矛盾を感じないであらう。

此繪卷の自然描寫には個性的特色が著しく、濃墨の細長い穂の筆で描いたイラ／＼した筆使ひは特異なものであるが、宋畫の影響として同時代の作品に通じる。最後に私は特に此の繪卷の個々の人物描寫について注目したい。この人物描寫に見られる第一の性質は人物が畫面乃至その環境に對して比較的自然的な比例を示してゐることであるが、更に個々の人物は細長い筆先に簡潔に纏められて、しかも或るつゝましき感情を

持ち、就中先づ輪廓を細線にて描き頭髮・眼・髭髯等を焦墨にて纏め上げる顔面描寫(例へば上卷第一段馬を控へる男の顔)は快いものと共に注目すべきものであると思はれる。と

云ふ意味は之に類似する人物描寫は新善光寺一遍繪傳、内藤子爵家藏魔佛一如繪(註五)詞等に於て見出され(趣味のある色彩感覺乃至粗い彩色法も亦通じる)、從つて之は之等繪卷の年代的定置に一つの照明を齎することになるからである。彼等に比較すると、此繪卷の人物描寫にはかゝる種類以外の他の様式が混在し、様式的純粹さに於て之は彼等に劣る。彼等は之に先行するに相違ない。

此繪卷は古筆了意在詞を二條爲重、住吉廣行が繪を豐後法橋と鑑定してゐる。(註七)爲重は至徳二年卒六十一歳。往々繪卷筆者に擬せられ、例へば東寺本弘法大師繪傳卷六はその筆と傳へられ、様式的近似を示すとは云へ、今は之等の書體が吉野朝より室町初期にかけて普通に在る一體であることを認め得るにとゞまる。豐後法橋とは甚だ不明の名であり、殆ど問題となし得ない。

最後に重要な奥書の問題が残つた。下卷末にある

右壹部三卷東山八坂吉祥園院

常住繪也

應永五年二月 日

なる銘記はその様態よりして何人も記年當時のものとして疑はないであらう。而して既に先に此繪卷の示す様式的年代がこの年記に矛盾しないことを觀察したが、私は此奥書が詞書と同筆ではないかと秘かに考へてゐるものである。

更に此奥書が示すところの此繪卷が最初に收藏されてゐた八坂の吉祥園院は、當時東寺勸智院に屬し、應永五年より少しく後れて賢寶の弟子融念が住持してゐたことが知られる(註八)が、之によつて此繪卷の製作を當代東寺繪所との關係に於て一應考ふべき一つの視野が開かれるであらう。

光明眞言功徳繪詞書 賀滋 明王院藏

此繪卷は何時の頃か世に出で、古筆了意は之を江戸青山の鳳閣寺に施入、のち大行滿願海の手に入り、慶應元年彼は之を明王院に奉納して現在に至つてゐる。之等のことは附屬の添狀奥書等が語つてゐるが總て註に譲る。(註九)猶繪卷中に捺された藏印(「高山寺」印)及箱蓋に捺さ

—